

## 保育者になったころ (5)

### 原 点

今から三十年以上も前のことになりますが、私は一九七五年四月、神奈川県立Y幼稚園の四歳児担任として保育者の第一歩を踏み出しました。

学生のころ、周りの友人たちのように、「幼稚園の先生になりたい」とか、「このことについて研究したい」というはつきりした考えをもつことができなかった私は、卒論と就職について同時に考えを進めていくことができませんでした。そして結局は社会へは出ることを避け、慣れた環境のもと、大学の研究室勤めをしていました。後に私自身が保育者となったときに支えられた、当時としては画期的な現職研修として始められた週一回の夜学の研究会のア

### 松井とし



シスタントをしたり、大学院のゼミに参加したり、カナダの友人宅へのホームステイをしたりと、自由な暮らしを謳歌していました。一ドルは三六〇円、アメリカ合衆国へ入国するにはビザが必要な時代でした。

### 保育者への道

幼稚園の現場での仕事の話が降ってわいたようにもち上がったとき、私は大いに悩みました。なぜなら、私の知る限り、幼稚園の現場はひどく混沌とした所のように思えました。さまざま保育観や、保守的で狭い女の園、お絵かきやお遊戯などと称され

る保育内容、これらのすべてが私を不安にしたのである。

研究室時代、附属幼稚園の子どもたちを観察するゼミがありました。周りの人たちは、ささいな子どもの動きを取り上げては、実に楽しそうにいろいろな角度から現象学的に考察するのです。観察に意欲的に取り組むことができなかった私は、当然ながら質の高い記録を提案することもできず、悶々としていました。

不安定な自分を抱えて生きていたので「それまで避け続けてきたにもかかわらず、なお保育者への道がひらかれた」と運命的なものを感じ、悲壮な覚悟で保育者になる決意をしたのです。偉大なる大先輩H先生の「子どものことを研究していく上で、一度は担任の経験が必要よ」と強く背中を押してくださいとひとことも忘れられません。

こうして恐る恐る同年の友人たちより六年も遅れて、幼稚園の現場でクラス担任としての一步を踏み

出しました。母校は教員養成大学ではなかったもので、手遊びも知らず、折り紙も折れず、ましてや指導案の書き方も知らず、ピアノだけは弾けるという不安だらけのスタートでした。

### 小さな小さな幼稚園

その幼稚園は戦後、県立高等学校の一室を借りて保育が始められた四歳児、五歳児各二十五名ずつの小さな家庭的な幼稚園でした。私が仕事を始めたころは、その高等学校の敷地内に建てられた独立園舎でしたが、園庭は狭く、二階には高等学校のプールが設置されており、決して恵まれた環境とは言えませんでした。ただ園内はフローリングで、木製の遊具や引き出しなどの家具は趣のある風情でした。

五十代半ばの専任の園長先生の下に、まるでお嫁さんのように担任が二人。五歳児のクラスの担任は、一年前に着任していた同窓生でその点では恵まれていましたが、養護教諭も事務職も隣の高等学校

の方々の兼務、職員会議も三人で、というありさまでした。

新学期の諸準備の傍ら部屋の壁に大きな緑色のラシャ紙を木の形に貼り、その上に淡いピンクとブルーの紙でクラスの人数分だけデフォルメした小鳥を飾り、最後に私自身を表す一羽を足して、これから二十五名の子どもたちと共に生活をしていくのだ、と決意を新たにすることを今でも鮮明に思い出します。

学生時代、ただそこに居るだけで気高い保育者そのもの、マリア様と呼ばれていた友人がいました。その生来の受容的な温かな雰囲気と、美しい笑顔の友人には及びもつかない新米の私でしたが、子どもたちは慕ってくれました。入園後間もないことでしたが、私が浮かかない顔をしていたのでしょうか。そばへやって来て私を見上げ、「せんせいどうしたの？」と心配してくれたクラスで一番遅く四歳になったばかりの小さな女の子、その鋭い感性に驚か

されました。無垢な子どもたちの屈託のない言動に、思わず大きな声で笑っている自分に驚くこともありました。

「遊ぶときは自由に伸び伸びと、しかしきちんとするときはわきまえてきちんとできるように」という園全体のねらいのもと、一日の流れは次のようなものでした。登園後全員が揃うと「朝のあつまり」をして、出席を確認し、それからお弁当前の片づけまで遊び、行事の前などは途中で片づけをして、その日の計画に沿った活動をするという日々でした。

## 日 案

幼稚園における一年間の行事や、保育の具体的な流れなど見通しのない新任の私にとって、日案を書くことは大変なことでした。

その上、話し合いで週の保育内容や流れは確認されるものの、その根幹をなすものが見えてこないのです。今にして思えば教育課程がきちんと構造化さ

れていなかったことへの困惑があったように思いますが。その幼稚園には教育課程はあるにはあったのですが、その教育課程とは、月のねらいや領域毎に細かな事象が並べられたものでした。

当時の幼稚園教育要領は昭和三十九年版で、望ましい経験や活動を配列し、指導計画を立てることが期待されていたように思います。計画、実践、反省・評価の循環において、教育課程研究は現在に比べるとまだまだ未熟なものでした。

わからないなりに、私は市販されている保育雑誌などには頼らず、子どもたちの様子をとらえつつ日案を書き続けました。しかし日案に対する当時の私の理解は浅く、前夜に日案を書く、「明日」という一日を既定してしまうような気がして当日の早朝に書いていました。

一行に書き表すねらいの中に、何とか幼児の主体性を表したい、と文言にこだわりつつ書き続けた四歳児、五歳児の日案を書き終えた時、私は感覚的な

がら教育課程の構造を理解していました。

### つらかった日々

しかし、実践の経験はないのに理想は高い私と園長先生との関係は、つねに緊張状態でした。ストレスだったのでしょうか、いろいろな病気が襲いかかってきました。一年目の連休中に発熱、秋には七転八倒の苦しみの十二指腸潰瘍、二年目の春には進級した五歳児の子どもたちの誰よりも先に風疹になってしまうというふがいなさでした。そしてさらに、初めての卒業生を送り出した春、せきが止まらず微熱も続き、食欲はなくどんどんやせてしまいました。子どもたちに絵本を読み聞かせていると、自分の声がガンガンと頭に響いて耐えられないという具合、それでも何とか保育をして、掃除を終えたと年休を取って早退する、という肩身の狭い日々が続きました。

自分の心身の中心が完全に喪失したという実感で

した。心身症だったのでしようか、当時はまだ心療内科はなく原因がわからぬまま、最後に眼科でひどい乱視であるとの診断を受け、眼鏡をかけることになりました。

既に一年目が終わるころ、「自分には保育者も向いていない」と恩師に打ち明けたことがありました。じつと話を聴き終えたT先生は静かに、しかし厳かに、「社会的には、三年間は責任があるでしょうね」と言われました。それでも私は「もう続けられない」と、この年、三年目の一学期で辞めようという心を決めていました。ところがそうこうしているうちに夏休みになり、私は不思議なくらい元気になっていきました。ようやく自分の眼がキラツと輝き、新鮮な再生を実感しました。もちろん、このころには既に園長先生の信頼も得ていました。

### なぜ続けられたのか

このように体調が悪かったのになぜ保育が続けら

れたのか、今、改めて考えても大変なことだったと思います。が、担任を選べなかった子どもたちに対する責任感だけで必死だったのです。

ピアノを弾くことは好きだったので、子どもたちと音楽を通して楽しみを共感することができたことも要因のひとつです。

さらに冒頭に挙げた現職研究会に参加し続けたことにより、週一度信頼できる人たちと、非日常の間をもつことができたことが大きな支えとなりました。この現職研究会は、毎週火曜日の夜、仕事を終えた保育者たちが各地から集まり、事例をもとに小グループで保育の本質について熱く語り合うものでした。最後に津守眞先生、本田和子先生、堀合文字先生、大戸美也子先生などがまとめの助言をなさるという、当時としては誠に先駆的で、熱心な実践者が待ち望んでいた質の高い現職研修だったので、新幹線で京都から通い続けた園長先生もおいででした。火曜日の夜、自宅とは反対方向の東京まで出か

け、研究会で共感や刺激を得て、私の一週間は水曜日から始まっていたのです。身体的には疲れても、精神的には支えられ蘇っていた、ということではないかと思えます。

保育者になってまだ日の浅いある日、恩師のT先生から一枚の葉書が届きました。そこには「あなたが水を得た魚のように輝いておられるので、喜んでいきます」と書かれていました。思いもよらない便りでした。自分はこんなにつらいのに保育者の資質については心眼をもっておられる恩師の眼に、私は「輝いて見えるのだ」と、包み込まれるような温かさをうれしく感じたことでした。

学生のころから「子どもが大好き」とか「子どもからエネルギーをもらい、共に居るだけで元気が出る」というようなことは決して言えない私でしたが、日々子どもたちとかかわる中で、少しずつ小さな喜びや感動が蓄えられていきました。自分が磨かれていると自覚できるようになり、結果的には多難

な状況を乗り越えることができたのだと思えます。

## インクルージョン

四年目からは、県の方針でクラス定員二十五名の中に三名の障がいのある幼児を受け入れることになり、若い先生とチームを組みインクルージョンの保育をすることになりました。

このことは幼稚園全体の保育が子どもたち一人ひとりの主体性が引き出され、充実を共感し合う保育に変わっていく大きなターニングポイントとなりました。私自身も子どもと共に生活を創っていく保育の心配えを徐々に感じ始めていました。

このころの忘れられない出来事として、街頭で見知らぬ男の子に後ろから声をかけられたことが挙げられます。私たちが課せられていた年一回の研究発表会の原稿を教育委員会に届けに行った帰り、官庁街の大通りを歩いていたときのことでした。突然後ろから、「おばちゃん！」と声をかけられたのでし

た。その子は歩きながらYWCAのスイミングスクールの帰りであることなどを自分から話してくれました。地下鉄の入口で「気をつけてね、さようなら」と別れた後、私は不思議な感動を覚えていました。

もしかしたら「子どもの神様」に出会えたのではないだろうか。見知らぬ子どもが後ろ姿の自分を信じて話しかけてくれた、保育者として子どもの世界に受け入れられたのではないだろうか、という感動でした。

## 廃園

担任になったはじめのころ、既に保育者となっていた友人が、『ぐりとぐら』（中川李枝子さく・福音館書店）を毎日読んでいたら、子どもたちが劇を始めて、それがとてもおもしろくて楽しいの」と笑いながら、本当に楽しそうに話してくれるエピソードをうらやましく聞いていた私でした。ところがい

つのころからか私も、そういった楽しさを実感できるようになっていました。このことは、私自身が子どもたちと日々を創る楽しみを自覚できるようになったことにより、子どもたちと保育者である私との相互作用において、協働の環境が生まれたものと考えられます。

保育者となった当初に比べ、活動の始まり方と活動のつながりや深まりにおいてその質が変わり、日々の保育は私に生きがいをもたらし、保育者は私の天職だと思い始めていました。

ところがまさにそのころ、県立幼稚園の廃園問題が起き、紆余曲折を経て、小さな幼稚園は一九九〇年三月に廃園、私の保育者生活は十五年間で幕を下ろすことになったのです。

心を込めて閉じた小さな幼稚園での担任としての日々は決して長くはなかったのですが、その後の保育研究において何ものにも代え難い珠玉の保育体験となっています。

## 最終章

## 若い保育者の方々へ

幼稚園の廃園の後、県の教育委員会で幼稚園教育の推進と充実にかかわる多くの仕事に携わりました。学校教育ではありながら義務教育ではなく、外からはその本質が見えにくい幼稚園教育はなかなか理解されず、被差別体験につながることも多々ありました。しかし、これらの体験は私の内なる保育者魂をしなやかに強くし、保育の本質を追究する意欲を高めさせたのです。

思いがけず再び保育実践の場に身を置くことになり、昨年十一月にはわが国の幼稚園教育にとって大きな節目となる、お茶の水女子大学附属幼稚園創立百三十周年記念事業を執り行いました。

これまでにかかわった仕事のすべてを生かし、無事に歴史を引き継ぐことができた、という安堵感と達成感ともに、保育者人生の最後のページを静かに閉じることができました。

研究室時代にH先生のゼミ合宿に参加し、屋久島に行ったことがありました。その折、無謀にも登山に挑戦したものの、頂上を前にして翌朝の豪雨で断念、山小屋のおじさんに傘を借り、必死の思いで下山し続け、やっとふもとに近づいたころ、周りが明るくなりました。いつの間にか雨はやんでいました。ふと顔を上げ振り返ると、淡い茜色の空に美しい山がそびえ立っていました。

この情景はその後もずっと心に焼き付いており、困難に出合うたびに思い出されました。つらい渦中にあるときには、その全容は目には見えないことが常だからです。

困難な状況を冷静に受け止め、後には「糧」となる展開を信じ、よりよく生きようと努力する在り方を学んだ、あの保育者体験は私にとって原点であると考えています。

(淑徳大学)